

令和8年度障害支援区分認定調査員研修資料 (現任者向け)

障害福祉認定調査 現任者研修

審査会に伝わる「質の高い認定調査」 と特記事項のブラッシュアップ

判断に迷うグレーゾーン事例の捉え方と
二次判定を見据えた調査実践

なぜ今、研修プログラムを一新するのか

Slide 02

🕒 従来の研修（これまで）

- ✓ 基本ルールのおさらいと短文作成
- ✓ 1項目ごとの判断基準の確認
- ✓ 短文の特記事項作成ワーク

⚠ 現任者にとって「知っている内容」となりやすく、実務の深い悩みに届きにくい

🎯 本日の研修（これからの視点）

- ✓ 「審査会（二次判定）視点」を取り入れた実践
- ✓ 「判断のブレ」が生じやすいグレーゾーンの紐解き
- ✓ 伝わる特記事項への書き換え（ピアレビュー）

💡 審査会（行政・専門職）が求める「客観的根拠の可視化」を目指す

本日のプログラムと到達目標（13:00～17:00）

Slide 03

13:00～14:05

【講義 & 演習①】 質の高い調査のポイント・グレーゾーン事例

質の高い調査のポイント整理と、回答が食い違う難解ケースの選択肢・特記事項検討

14:15～15:05

【演習②】 特記事項ピアレビュー（グループ相互添削）

「伝わらない文章」をグループで相互添削。審査会に届く具体的な記述へブラッシュアップ

15:15～17:00

【演習③ & 講評】 模擬審査会 & まとめ

審査委員・行政の役に分かれ模擬審査会を実施。判定プロセスの疑問を解消

一次判定（コンピュータ判定）

- ✓ 全国一律のロジックによる機械的な算出
- ✓ 選択肢のチェックのみで判定（介護の手間の量）

【限界】 選択肢だけでは「実態と合わない」結果が出ることがある（見えにくい支援・精神発達障害など）

二次判定（市町村審査会）

- ✓ 「一次判定 + 特記事項 + 医師意見書」を総合評価
- ✓ 一次判定の変更・補正には「客観的根拠」が必要

【カギ】 特記事項こそが審査会委員の「目」。特記事項が薄いと必要な支援が反映されない！

① 「できる」の誤解

一人で完璧にできて初めて「できる」。声かけ・見守り・確認が必要なら「支援あり」と捉える。

② 日内変動・波

「調査時の好調な状態」のみで判断せず、過去1週間の平均的な介護の手間を評価する。

③ 本人・家族の相違

「できます」と言う本人と困窮する家族。感情的意見ではなく「観察できた事実」を拾う。

④ 行動・精神障害

目に見える身体介助だけでなく、パニック予防の「配慮」「立ち会い」の手間を可視化。

原則 1

【具体化（5W1H）】

「時々」「概ね」「大変」などの曖昧な言葉を排除し、「週3回程度、入浴後に…」と頻度や場面を数値・具体例で明記する。

原則 2

【必要な支援と理由】

「～の状態である」で終わらず、「そのため〇〇の介護・見守りが毎日必要」と支援の手間までセットで書く。

原則 3

【不整合をなくす】

選択肢が「介助なし」で特記事項に「毎日手助けが必要」と書くと矛盾が生じ、審査会で保留・再調査になってしまう。

特記事項の比較：審査会で判断できるか？

項目	困る特記事項 (NG例)	情景が浮かぶ特記事項 (OK例)
意思疎通	NG 意思疎通が難しく、会話が噛み合わないことが多い。	OK 質問と関係ない単語を繰り返す。日常会話の成立率は3割程度で、意図の汲み取りに時間を要す。
行動障害	NG パニックを起こすことがあり、家族は大変苦労している。	OK 週2～3回、予定変更時に大声で壁を叩く。家族が別室へ誘導し鎮静化を図る（1回15～30分）。
服薬管理	NG 服薬の管理を行っている。	OK 飲み忘れや重複服用があるため、母がお薬カレンダーにセットし、毎食後声をかけて服用を確認。

調査員役の皆様へ

- ✓ 「第三者が読んで情景が浮かぶか」を意識する
- ✓ 自分が直接見た事実と、聞き取った事実を区別して整理する
- ✓ グループワークで他者の視点や表現工夫を吸収する

行政・審査会担当の皆様へ

- ✓ 「審査会で議論・保留になるポイント」を提示する
- ✓ どの情報が足りないと判定できないかの視点を共有する
- ✓ 調査員と対等な立場で「より良い調査」を目指し議論する

演習のテーマ・目的

【演習テーマ】

事例A（脳性麻痺・身体障害事例）を通じた調査項目の選択基準の再確認

【演習の目的】

- ✓ 日常動作・行動障害項目の「判断の定義」を正確に理解する
- ✓ 主観を排除し、全国一律の認定調査マニュアルに基づく正確な選択を行う

 実施時間：計 50 分間

演習1：全体進行プログラム（計50分）

Slide 10

STEP 01

個人検討（15分）

- 【趣旨説明・事例確認 5分】 演習のねらいと事例Aの全体像を把握
- 【各自で調査票記入 10分】 事例に基づき、根拠を持って「調査項目の選択」を実施

STEP 02

グループ協議（25分）

- 【答え合わせ 10分】 各自の選択結果を持ち寄り、班内で一致・不一致を確認
- 【マニュアル議論 15分】 「判定が分かれた項目」について定義に基づき意見交換

STEP 03

全体共有 & 講師解説（10分）

- 【標準的な選択基準解説】 迷いやすい重要項目のポイントを解説／【質の平準化】 全国一律の判断軸を再確認

ねらい1

根拠の明確化

なぜその選択肢を選んだのか、介護の手間を客観的数値で書く

ねらい2

状況の立体化

単なる症状でなく「環境・道具・介助内容」を組み合わせで書く

ねらい3

不整合の追放

一次判定選択肢と特記事項の矛盾を徹底的に排除する

✕ 不十分なラフ案

「入浴時は体が不自由なため、母が体を洗っている。全介助である。」

- ✕ どの部位に介助が必要か不明
- ✕ どんな補助具や手すりを使っているか不明
- ✕ 浴槽跨ぎや移動の手間が伝わらない

💡 改善のための重要要素

- ✓ **身体機能の限界:** 体幹機能障害のため自立保持不可
- ✓ **具体的な介助領域:** 洗身（背部・下肢）、洗髪
の全介助
- ✓ **安全確保の手間:** 浴槽移乗時の抱え上げ、シャ
ワーチェア使用

模範解答例

下肢の筋緊張と体幹機能障害のため、通常の入浴動作は困難。洗髪・洗身（特に背部および下肢）は全額介護者が実施（週3回）。浴室跨ぎは転倒危険が高いため、シャワーチェアに移乗させ、母が身体を抱えながら浴槽跨ぎを全介助している。

✓ 頻度: 週3回と明記

✓ 理由: 筋緊張・体幹障害

✓ 動作: 洗身部位と抱え上げ介助

「1.8 排尿」 不十分な記述と改善のポイント

Slide 14

× 不十分なラフ案

「トイレでの排尿は失敗することもある。時々失敗するので介助が必要。」

- × 「時々」の頻度が不明
- × ズボンの着脱や後始末の介助内容が抜けている
- × 失敗時の対応に伴う介護の手間が見えない

💡 改善のための重要要素

- ✓ 失敗の頻度: 1日〇回、または週〇回と数値化
- ✓ 排泄関連動作: ズボンの下げ・上げ、拭き取りの可否
- ✓ 夜間と日中の違い: 誘導の有無やパッドの使用状況

模範解答例

日中は声かけによりトイレへ向かうが、手指の拘縮によりズボン・下着の着脱が困難であり、毎回介助が必要。排尿後の拭き取り確認および衣服の整えを全介助。週2回程度、間に合わずに失敗（失禁）することがあり、その際は汚染衣服の交換および床の清掃を実施している。

✓ 定常介助: 毎回ズボン着脱・拭き取り

✓ 失敗頻度: 週2回程度の失禁

✓ 附随業務: 着替え・床清掃の手間

原則 1

主観表現の排除

「大変」「概ね」などの形容詞を止め、回数・時間・頻度（5W1H）で書く

原則 2

「状態＋介助」セット

「〇〇の障害がある」で終えず、「そのため〇〇の介助を行っている」まで記述

原則 3

一次判定との整合

選択肢のチェック結果と特記事項の記述に矛盾がないことを最終確認する

🔍 着眼点 1

「回答のずれ」に着目する

なぜメンバー間で選んだ選択肢が分かれたのか？マニュアルの解釈の違いや見落としたエピソードがないか議論する。

💬 着眼点 2

「審査会委員ならどう読むか」を問いかける

「この1行だけで具体的な介護の手間がイメージできるか？」「情報が不足して判断保留にならないか？」を吟味する。

演習1の振り返りポイント

- ✓ 選択肢を選ぶ際は、個人の経験則やローカルルールではなく「**全国一律認定調査マニュアル**」に立ち返る。
- ✓ 身体障害における「できる」は、安全に単独で完結できるかどうか境目。
- ✓ 特記事項は「**一次判定の補正根拠**」となるため、数値と具体的エピソードが不可欠。

事例B（自閉スペクトラム症・20代男性）

【状況】 身体動作は自立しているが、こだわりが強く、急な予定変更で強いパニック（大声・自傷行為）が発生。普段は穏やかで会話も成立するが、不調時の波が激しい。

【すり合わせのポイント】

動作自体は「できる」が、パニック予防のための事前調整・立ち会い・声かけの手間をどのように評価し特記事項に落とし込むか。

選択肢の判断

「集団への適応」や「特別な配慮」項目において、単に放置するとパニックを起こすため、常時支援者の確認・事前アプローチが必要 → 「支援あり」と判断。

特記事項の記述ポイント

週何回、どのような状況でパニックが起き、支援者が何分かけて鎮静化を図っているか（事前スケジュールの視覚化等も含む）を具体化して記述。

目的 1

客観的視点の獲得

他人が書いた文章を読むことで、「情報が足りない」「情景が浮かばない」原因を客観的に認識する。

目的 2

相互ブラッシュアップ

「こう書けば審査会で伝わる！」という表現テクニックや視点をグループ内で共有・修正する。

≡ 添削チェックリスト

- ✓ **【5W1Hはあるか】** 頻度（週〇回）、場所、時間帯が数字で入っているか？
- ✓ **【抽象語はないか】** 「時々」「大変」「概ね」「介助が必要」で終わっていないか？
- ✓ **【介護の手間が見えるか】** 支援者が具体的に「何分・どのような手助け」をしているか？
- ✓ **【選択肢と合っているか】** 一次判定のチェック項目と内容が一致しているか？

演習2 振り返り：伝わる特記事項への書き換え実践例

Slide 23

添削前（ピアレビュー前）

修正前

修正前

「金銭管理は一人でできない。買い物の際に失敗することがあるため母が手伝っている。」

添削後（ブラッシュアップ後）

修正後

修正後

「計算障害のためお札しか使用できず小銭が溜まる。週2回の買い物時、母が同行してお釣りの計算と支払いを全介助している。」

演習3：模擬審査会の狙い

演習①・②で仕上げた調査票をもとに、実際に「審査会（二次判定）」を開催します。

役割に分かれて議論することで、「どのような特記事項があれば一次判定を変更できるのか」「逆にどのような書き方だと判定保留になるのか」を体感します。

役職 1

審査委員役

一次判定・特記事項・医師意見書
を読み込み、区分の妥当性を審議
・判定する。

役職 2

行政事務局役

審査会の進行、資料説明、委員か
らの質疑に応答しスムーズな運営を
行う。

役職 3

調査員役（観察者）

自分の調査票がどう評価されるか
を客観的に聞き、改善点を発見す
る。

精査のポイント

- ✓ 一次判定結果（区分3）に対し、実態は区分4相当ではないか？
- ✓ 特記事項に一次判定を上回る「介護の手間」の記載があるか？

審査委員の視点

「特記事項に『大変』としか書いておらず、手間の頻度が分からない。これでは一次判定を変更する根拠にならない！」

二次判定の合議プロセス

委員間で「意見書の内容」と「ブラッシュアップされた特記事項」を突き合わせます。

【変更成立の例】

特記事項に「毎日夜間に2回の体位変換と失禁対応で各30分を要している」と具体的に数値化されたため、一次判定（区分3）から【区分4への変更】が合意された。

判定結果の記録と理由

- ✓ **確定判定：** 障害支援区分 4
- ✓ **変更の理由：** 一次判定に反映されない夜間の頻繁な排泄介助および体位変換に伴う介護の手間が、特記事項により客観的に証明されたため。
- ✓ **特記事項の重要性：** 説得力のある特記事項が判定を正しく導いた。

審査委員役より

「具体数字（週〇回・〇分）があると自信を持って判定変更できることが実感できた。」

行政事務局役より

「曖昧な特記事項がいかに関審査会の時間ロス（照会・保留）に繋がるかがよく分かった。」

調査員役より

「自分の何気ない1行が、対象者の区分決定を大きく左右するという責任を再認識した。」

★明日からの3つの約束

- ① 形容詞を捨て、数字で書く（5W1H）
- ② 「状態」だけでなく「介護の手間（支援内容）」まで書く
- ③ 「第三者（審査委員）の目」になって最終チェックを行う

質の高い認定調査が、対象者の適切な支援につながります。ご清聴ありがとうございました！